

上

乙亥六月十四日

聖始金知事

同十八日晴ハ十一度

同十九日晴ハ十九度

午後一時金知事入館ス訓導

別差之レニ從フ別席ニ於テ七等書記生往永辰安

并ニ佐永友輔ヲシテ面晤其来意ヲ問ハシム知事

云ク兩國緊重ノ事件ニ自某今般別遣ノ令ヲ奉シ

来レリ特ニ理事官公へ面議ノ紹介ヲ乞フト書記

生曰面議ノ趣意如何云ク貴國トハ到底和好ニ帰

セサル可ラサルヲ以テノ故ニ面議ヲ請フナリ曰

ク六月廿四日貴國既ニ不許接ノ決答ニ及ハレ其

後猶更ニ另ニ和好ヲ保ツノ道アリヤト尋子ラレ

シニ無之トノ答アルヲ以テ副官先發其背約ヲ上

外務省

奏セラレシコ定メテ聞知アリタルナラン而テ正

官ハ暫時滞館以テ公務ヲ結束スト雖モ迎艦ノ来

ルヲ待テ速ニ帰朝アル可キナリ皆是貴國拒接ノ

決答ニ依ル所ニシテ今又何ヲカ議セントスルヤ

抑前議ニ反シタル好意有テノコナルヤ云ク必ス

シモ然ラス曾テ訓導ヨリ陳述セシ如ク新服ニテ

接スレハ則チ新例ヲ叙ルナリ新例ヲ叙ムレハ我

國ノ福ヲ去ルナリ因テ茲テ旧ノ如ク舉行ス可キ

ノ令意ニテ尚別遣ヲ以テ鄭重陳言ス可シトコ

ナリ故ニ先艦ヲ厭ハス下米セリ曰ク前後一議ヲ

以テ面晤ヲ請ハル、モ畢竟無益ノコナラスヤ云

ク然リト雖モ朝廷特ニ別遣セラレシコナレハ願

クハ申請セラレコトヲ祈ル曰ク諾此日訓導曾テ

兩國間ニ障碍セシ崔在守ノ興黨金未吉ヲ俱シ来
ルヲ見ル因テ之ヲ詰ラシメテ曰ク我國人民在守
等ノ爲ニ罪ヲ得テ未タ放免ニ逢ハサル者現ニ數
名アリ貴國ニ於テモ其有罪ヲ審ニセンカ爲メ之
ヲ入獄セシメラズヤ且今般外務大丞書契中即チ
此事ヲ掲ケアルハ曾テ熟知ノ通理事協成ニ至ラ
ハ必ス其處分アル可キハ貴國ノ義務ナルニ今突
然之レヲ俱シテ入館スルノミナラス刺ヘ我本廳
ニ上ルハ何ソ我ヲ蔑視スルノ甚シキヤ訓導云ク
僅ニタル輕輩ノ私役ニ供スルヲ館中ヨリ是非ス
ルハ其理アル可ラス曰輕輩ト雖モ罪ヲ兩間ニ負
シ者ナラズヤ今足下ノ使役ニ充ルハ即チ貴國之
ヲ公役セラル、ナリ然レモ其充役ノ是非ヲ論ス

外務省

ルニ非ス如此奸細ノ輩今後入館セバ我館民ノ再
ヒ罪累ヲ負フモノアルニ至ランコトヲ恐ル故ニ預
シメ之ヲ保護ヲナスハ公館ノ義務ナレバナリ知
事云ク是レ畢竟瑣事ナリ願クハ速ニ正官公面晤
ノコトヲ周旋アリタシ曰ク諾退テ之ヲ陳ス二回又
進テ言ハシメテ曰ク正官公ノ敎意ニ這般履約渡
海ハ固ヨリ貴國官并ニ接シ事ヲ理セシカ爲ナリ
然ルニ貴國我版制上ニ喙ヲ容レ論難五ヶ月ヲ相
持シ最後拒接ノ決答ニ及ハレ其背約反信ノ意顯
然終ニ口舌ノ能ク了スル所ニ非サルヲ以テ副官
己ニ歸奏セリ本官モ亦迎艦ノ渡来ヲ待テ歸京セ
ントス蓋シ貴國最後ノ決答ハ兩國好交成否ノ斷
案タリ然ルニ今別遣ヲ派シ前後一議ヲ株守シ以

テ面晤ヲ請フ是我輩ヲ籠絡シ隣國ヲ侮弄スルナ
リ縱令貴國今前議ヲ革メ来リ請フモ己ニ復命ノ
後ニ在テハ其實効ヲ見ザレハ敢テ相接スヘカラ
ス況ンヤ別遣委負トナラハ東萊府使ニ接スルト
同シ必ス礼貌ヲ備ヘテ之ヲ待タサル可ラス然ル
ニ其礼服ハ既ニ貴國ノ擯スル所タリ是レ貴國先
ツ面議セサラシムルノ地ヲ為シテ試ミニ面議ヲ
求ムルナリ豈之レヲ容ル可ンヤ別遣ハ死人ト聞
ケリ私情諒ス可シト雖臣公義如何セン知事云ク
實ニ然ルカ如シト雖臣兩國ノ和好ハ早晚協成ニ
帰セサル可ラス故ニ今古稀老耄ノ某ヲ特遣セラ
レシニ面晤不能ハ朝命如何トモスヘキナシ服色
ノ紛議未ダ了結セサレハ平服ニテ面晤ヲ乞ハバ

外務省

如何曰ク如此スレバ貴國ノ派負ヲ輕ンシ又我朝
命ヲ重ンゼサルナリ云ク然ラハ内謁ニテモ許容
セラレマシキヤ猶尽カ周旋偏ニ依頼スル所ナリ
ト頻リニ迫ルヲ以テ退テ陳シ三回又進テ言ハシ
メテ曰便服面晤ヲ請ヒ又内謁ヲ求ラル、ニ至テ
ハ是貴國ノ威ヲ貶セラル、ナリ仮令國王殿下親
ラ来リ乞ハル、モ礼ニ非スシテハ決シテ接セス
情勢此ニ至リシハ貴國ヨリ我ヲ擯セシモ必竟自カラ
斥セラル、ナリ別遣ノ朝命ヲ重ンゼラル、ハ我
朝命ヲ重ンスルト同シ己ニ拒接ヲ以テ答ヘアル
上ハ他日我朝廷ノ措置ヲ待テ進退セサル可ラス
知事訓導共ニ云ク事理一々承服猶明日入謁スヘ
ケレハ此上ノ周旋希フ所ナリ曰ク訓導ハハ不日

面晤ノ上告知ス可キ条件アリ報知次第入館コレ
アリタシ云ク唯命之レ從ハン然リト雖正官公
退館ノ頃ハ下官モ亦上京若クハ當任ニ居ラサル
トモ有ニ歟別差モ亦近日飯京スヘシト語畢テ退ク
同二十日陰^{七十八}度陪通事金福珠金正植二人金知
事玄訓導ノ意ヲ承テ來ル佐永辰安之ニ接ス福珠云
ク昨日理事官公ノ話ニ別遣堂上トアリテハ東萊
府使ノ相接モ同様ナレハ禮貌ヲ備ヘサレバ面接
スヘカラス別遣ヲ敬スルハ貴國ヲ敬スルナリト
夜來熟考スレハ事理至當一言ノ更ニ陳ス可キナ
シ今般ノ朝命モ亦舊ニ依テ相接ス可シトノ意ナリ
若シ夫レ新股ニテ面晤スレハ違命ノ譴責免カ
可ラス此情ヲ以テ猶一應便服面晤ノヲ請ヒ終

外務省

ニ聽許ヲ得サレハ即日上啓セサル可カラス因テ
懇切申請ニ及フナリト曰ク已ニ拒接ヲ以テ答ヘ
事不成ニ決シタル上ハ曖昧相接ヲ須ヒズ啓聞上
申素ヨリ別遣ノ隨意タルヘシ太ク貴意ヲ領セリ
而ソ理事官公近日歸國アルヘキヤ曰ク迎艦ノ入
港スル乃チ其時ナリ

同二十一日雨^{七十二}度

同二十二日雨^{七十三}度午後雨晴ル第七號公信風波

ノ爲ニ發スルヲ能ハス終ニ今日ニ至ル依テ再ヒ
第八號公信ヲ裁シテ共ニ發ス且ツ左ノ暗號電報
ヲ作り廣津ニ報ス

十九日ニ別遣來リ渾テ同ジ其故面會セザル
也大急御指令可被下致企望候手紙差出シ申候

八年七月廿二日

在朝鮮國 森山

東京中六番町十二番地
廣津

同二十三日陰七十七度 金知事ヨリ任永等ニ左ノ書

ヲ致セリ亦因弄ノ端ヲ造サントス

公候平安ナリヤ承リ度シ僕ハ因慙莫甚 同々

セリ奇別致スハ別儀ニアラス今日コソ状啓封

発スヘキニツキ一朝ヲ經ハ左右間回報ヲ見ル

ヘシ因テ此緣由ヲ 正官公ニ通シ以テ回示下

サル、ヲ千萬依頼ス餘不備上

乙亥六月廿一日

別遣堂上聖始金知事

任永書記生ヨリ回答セシムルヲ左ノ如シ

不図接 使書本日状啓封發一朝間左右回報下

来云公之状啓非我之所関公幹之事 貴國己以

外務省

断然不可許施確答則 貴國自應有意之在而然

公亦所詳悉也本日之使書僕不能了其示意惟公

之英明内省熟慮則情事自判然矣冀 諒之餘意

面謁拜復

明治八年七月廿三日

任永七等書記生

同二十四日陰七十八度

同二十五日晴七十八度 芳九号公信ヲ發ス

同二十六日晴八十三度

同二十七日晴八十三度 別差ヨリ交代ノ期満ナリ且病

ノ為ニ昨日上京セシ旨ヲ任永書記生ニ書ヲ致シ

テ報セリ

同二十八日晴八十四度

同二十九日陰八十九度

同三十日晴	八十五度	外務省	ニ許施スヘカラスト損存シ以テ我ヲ辱ソリ今何ノ議スル所カアラン貴國改圖別ニ親好ヲ保ツノ命アラハ格別ナリト雖モ前後一議ヲ以テ對面ヲ請フハ何ノ底意ソヤ正植云ク誠ニ然リ頃日別遣更ニ啓聞スル所アリトイヘモ只其手數ヲ尽スノミニソ必竟我朝廷前議ヲ改メ和好ヲ講スル等ノ意アルマジキナリ僕輩ニ於テモ苦念ニ不堪故ニ此事緊密ニ関ルト雖モ内情ヲ吐露スルナリト話ヲ退ク	同五日陰	同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
八月一日晴	八十八度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同二日晴	七十九度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同三日晴	八十七度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
ナリ即夜十二時抜錨但シ韓人等理事官ノ迎艦ナラシカト疑フ					同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同四日晴	八十三度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
記生寓ニ来リ丁卯艦渡泊ノ緣由如何ト問フ因テ理事官ヘノ公事アリテノ故ナリ其委曲ハ得テ知ル可ラスト答フ正植云ク正官公ニ於テモ一タビ別遣ニ對話アリテ如何曰ク別遣下来ノ主意本ヨリ解ス可ラスト如何トナレハ我理事官公ハ約ニ依テ来ラレシヲ貴國信義ニ反シ突然旧例ヲ援テ終					同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
ニ許施スヘカラスト損存シ以テ我ヲ辱ソリ今何ノ議スル所カアラン貴國改圖別ニ親好ヲ保ツノ命アラハ格別ナリト雖モ前後一議ヲ以テ對面ヲ請フハ何ノ底意ソヤ正植云ク誠ニ然リ頃日別遣更ニ啓聞スル所アリトイヘモ只其手數ヲ尽スノミニソ必竟我朝廷前議ヲ改メ和好ヲ講スル等ノ意アルマジキナリ僕輩ニ於テモ苦念ニ不堪故ニ此事緊密ニ関ルト雖モ内情ヲ吐露スルナリト話ヲ退ク					同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同五日陰	七十九度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同六日晴	七十七度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同七日晴	七十八度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴
同八日晴	八十二度				同五日陰	同六日晴	同七日晴	同八日晴

同九日晴^{八十四度}午前第八時英國軍艦ホルキ号入

港ス依テ尾間書記生ヲシテ問情セシムルニ左ノ書翰ヲ致セリ

英國軍艦ホルキ號ナリ今朝嚴原ヨリ着セリ此
序テニ修謝ヲ述ントス上陸ハ何時ヲ以テ都合
トスルヤ敢テ確報ヲ請フ且當艦ハ暫時繫泊直ニ長
崎ニ向テ退歸スヘシ故ニ書翰類ノ内地ニ發セ
ントスルアラハ將ニ依托ヲ受ントス茲ニ貴意
ヲ得度不具

英國公使館上等士官プラケット

第十時理事官行テ上艦シ本地今日ノ情況ヲ述テ
其上陸ヲ阻ノ且之レニ托シテ本省行第十號公信
ヲ發ス午後一時二十分錨ヲ拔テ歸ル

同十日晴^{七十九度}金福珠住永書記生ノ寓ニ來リ昨

外務省

日英艦ノ來由ヲ問ヒ且中元節出門ノ日字ヲ減セ
ン^一ヲ乞フ書記生其不可ナルヲ以テ答フ彼云方
今別遣上啓其回下ヲ待ツノ時ナレハ宜シク斟酌
以テ減日セン^一ヲ請フ而テ其狀啓ノ回下モ本月中必ス下來スヘ
ケレハ其時ニ至リ公幹ノ成否モ自ラ確定ス可シ曰ク向キニ已ニ
断然不應ヲ以テ答ヘ又更ニ成否ノ確定トハ何ノ意ヤ彼云ク協
カニ其下教ノ如何ヲ察スルニ我レ服制ノ事ヲ論
難スト雖^レ貴國ニ於テ到底變通ナラサルヲ知ル
故ニ此事ニ於テ再ヒ異議アル^一ナカルヘシ只書
契國文ナルモノ我國未タ其字解ニ通セサレハ惑
ビ無キニ非ス希クハ爾後漢文ヲ以テ單用セシ^一
ヲ懇議アラシカ是レ愚察ニ出ルト雖^レ恐ラクハ
此兩事ノ外ニ出サルヘシト語^リテ歸ル是亦例

ノ閃弄爰幻ノ故智ヲ以テ回顧セシメントスルカ		頂ラク其時ヲ至ラハ判然タルヘシ		同十一日晴		ハハ十一度		同十二日晴		ハハ十一度		本省ヨリ葵八号公信達ス書中		副官着京且ツ別遣下来ノ如何ヲ細報スヘキ等ノ		事ヲ載ス		同十三日晴		ハハ十四度		中元節ニ付今日ヨリ四日間依		例出門古館ニ往来ス此日葵十一号ノ公信ヲ載ス		同十四日晴		七十五度		此日廣津副官ノ書信及ヒ長崎		縣參事渡辺徹ヨリ左ノ電報ヲ轉達シ来ル		別遣来レリトノ電報達セリ近クマサニ指令ア		ルヘシト森山ハ言ヒ送ラレシヲヒ		八月三日		東京外務省 廣津		外務省		參事 渡邊		同十五日晴		ハハ十九度		同十六日晴		ハハ十五度		同十七日晴		ハハ十二度		同十八日陰		ハハ十五度		同十九日晴		ハハ十四度		同二十日陰		ハハ十三度		金正植住永ノ寓ニ来リ云ク別		遣上啓ノ回教果シテ近キニ在シトス而テ此度ノ		回教ト雖臣前議ヲ爰シ貴意ニ從フヲ萬ニコレア		ル可ラス察スルニ理事官ノ着服如何ヲ問フニ及		ハス只面晤ヲ遂ルヲ旨トセヨトノ意ナランカ如		是不都合ノ最意ナルニ於テハ訓導モ館中ノ意向		ト相合サルヲ知ル故ニ就館ノ下僕等ニ問議アル	
-----------------------	--	-----------------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	---------------	--	-----------------------	--	------	--	-------	--	-------	--	---------------	--	-----------------------	--	-------	--	------	--	---------------	--	--------------------	--	----------------------	--	-----------------	--	------	--	-------------	--	-----	--	----------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	-------	--	---------------	--	-----------------------	--	-----------------------	--	-----------------------	--	-----------------------	--	-----------------------	--	-----------------------	--

可シ而ノ僕等如何答フヘキヤ公ノ指教ヲ乞フト
 住永未夕事ノ明瞭ナラサルニ可不可ヲ論スルニ
 由ナシ只入館以テ懇議セラレテ可ナリ我輩中ヨリ周旋
 スルハ傳語者ノ任ナリ云々然ラハ入館ノコヲ勸
 誘スヘシ今般理事官公ノ渡航アルヤ元是我ノ請
 求ニ出テ而ノ昨約烏有トナリ総テ背反ノ議ニ及
 フハ萬々我邦ノ非理トス只十中六七ハ昨約ニ從
 ヒ三四ハ旧例ニ依ル等ノコヲ懇議アラハ兩國和
 好ノ地ニ歸ス可キニ又遺憾ト云フ可シ訓導素ヨ
 リ其理非曲直ヲ知ルト雖モ我朝議固執不動故ニ
 亦如何トモスヘカラスト相語テ歸ル

外務省

同二十二日晴 八十七度
 同二十三日陰 八十七度

同二十四日晴 八十二度
 同二十五日雨 七十七度

華島迎ヘ日本ノ火輪船三隻来リテ測量ヲ為スノ
 風説アリト云フ

同二十六日晴 八十三度

同二十七日晴 八十一度

同二十八日晴 八十一度 一昨廿六日前東萊府使朴濟

寛大五監司ニ昇任セリトノ説アリ

同二十九日晴 七十八度 晩雨

同三十日晴 八十七度

同三十一日晴 七十九度

九月一日陰風 七十五度

同二日晴 七十三度

同三日陰		七十三度
同四日晴		七十六度
狀啓ノ回報未タ下来セス		達信ハ己ニ
ニ然リ頃日支那ノ反賊我國ニ逃竄セシ蹤跡アル		朝廷多事故
ヲ以テ支那政府ヨリ使ヲ遣ハシ速ニ之ヲ捕獲シ		
出スヘシト詰ル察スルニ此賊我國中ニ潛匿シア		
ルヘケレ氏固ヨリ我ノ誘致スル所ニ非ス又云ク		
同僚正植ナル者奸徒宋吉ト協同シ館中ノ景況ヲ		
証冒假造シ以テ訓導ニ密告スルヲ頻ニナリ訓導		
之ヲ信シ他ノ同僚ノ疑ハルヲ尤モ深シ僕輩只		
緘黙禍ヲ避シテカムルノミ俊郷歿シテ昔運起		
リ在守倒レテ宋吉正植ノ徒之ニ繼グ兩國將來ノ		
事亦思フ可シト歎息シテ歸ルト云フ		
外務省		
朴濟寛大丘監司ニ昇任セリトノハ虚説ニシテ		
昇任セシハ則其親族從兄ノ人ナリト云フ		
同五日晴		七十六度
同六日晴		七十六度
同七日陰雨		七十七度
同八日晴		七十七度
同九日晴		七十八度
院君復任入城セリ		金應祚ノ詔ニ七月初旬
此日本省ヨリ本月廿五日ノ電報同廿七日ノ電報		共ニ同ク達ス其廿五日ノ報ニ云ク但シ皆長壽縣
ヲ經テ来ル		
在韓森山茂ヘ其地退去ハ決セリ近キニ満珠丸		
ヨリ指令ヲ送ル可シト申シマラレヨ		

八月廿五日 東京寺寫外務郷

長崎宮川縣令江

廿七日ノ報ニ云ク

置手紙ハ見合セヨ極穩カニ満珠ノ到ルヲ待
テト對馬マテハ押切漁船ニテ森山ヘ傳ヘラ
レヨ

東京外務省廣津

宮川長崎縣令

同十日雨	七十七度
同十一日晴	七十七度
同十二日晴	七十七度
同十三日晴	七十七度
同十四日陰	七十七度

外務省

同十五日晴	七十七度
同十六日晴	七十七度
同十七日陰	七十七度
同十八日晴	七十七度
同十九日晴	七十七度

耳語スル件アリ向ニ支那ヨリ急報アリ云ク八月
中旬迄ニハ英艦進テ其海岸ヲ侵撃スルコアル可
シ豫防專一ナリト果シテ本月初旬英艦三隻日本
ア名案込威鏡道ニ侵入ス於是地方ノ鎮將命ニ依テ
千百ノ水陸軍ヲ發シ豫船數隊ヲ以テ英艦ヲ圍ム
英兵之ヲ撃破シ其北ルヲ追ヒ將ニ上陸セントス
陸軍之ニ當リ以支持スルコト少時終ニ敵ス可ラス
シテ敗走シ險ヲ保テ固ニ依リ急使ヲ駛テ狀ヲ都

ニ報シ以テ援兵ヲ乞フ援兵未タ至ラス而シテ英艦
拔鎗引退セリ此舉死傷甚ク夥シ英人ハ更ニ一人
ノ死傷ナシト云

又頃日全羅道ヨリ歸ルモノ、話ニ方今外國ノ軍
艦全羅道ニ來リ未タ爭端ヲ開カサレテ該道ノ騷
動甚クシ故ニ釜山水營等ノ官吏軫念不尠頃日ハ
公館北濱ヨリ石礮ヲ運搬シ城内ニ畜ヘ以テ敵ノ
上陸スルアラハ之ヲ乱擲シテ防禦スルノ策ナリ
ト云

陪通事金正植來リ任永書記生ニ話シテ曰咸鏡道
英艦侵撃ノ説ハ未タ詳ラカナラサレトモ支那ハ
方今各國ノ軍艦ニ侵撃サレ戦争開ナリトノ急報
アリ支那ノ衰運思フヘシ我國叢尔タル小国ナレ

外務省

ハ外人之ヲ度外ニ措クカ故ニ外患少ナキカ水軍
ハ彼レニ輪ルモ陸戦ハ我カ長スル所況シカ弓砲
投石ノ術アリ彼レ等ノ勝リヲ得シ又云ク大院君
入城國權復タ其子ニ歸ス就テハ大臣黜陟回議一
変上下紛擾後日ノ如何謀ル可ラスト歎息シテ歸
ル

同二十日晴七十四度午後三時三十分迎艦金花丸入港
ス外務卿ノ指令アリ左ニ

理事官外務少丞森山茂

一理事ノ都合上申ノ為ノ帰朝可致事

一在勤出張官負ノ内一二名ヲ撰ミ留メ西国漂流民
送受ノ取扱ヒ并ニ在任商民取締リノ儀等從
前ノ通指圖可致置事

明治八年九月 日

外務卿寺島宗則 印

明日ヲ以テ拔錨歸京ノ期トス依テ住永書記生ヲ
シテ左ノ書ヲ訓導ニ致サシム

訓導公 前上

理事官公有須歸京之事職裝既成不日將發乃
使僕報之于 公 公宜諒此意以致之于 東

萊府使公前暫上

明治八年九月二十日 住永書記生

同廿一日晴 午前九時訓導別差ヲ随ヒ就館住永
書記生ヲシテ応接セシム訓導云ク昨夕貴書接到
セリ理事官公ノ迎艦来リ歸朝方サニ迫リト今春
来兩情不合終ニ中道ニシテ歸國セラルハ甚ク

外務省

遺憾ナリ送別ノ為ノ今日入館セリト曰ク領悉セ
リ歸裝劇甚中ナレバ閑ヲ得テ傳致スヘシ但足下
事中道ニシテ歸國アルト言フハ難解語ナリ貴國
既ニ断然拒接ヲ以テ確答セシナラズヤ云ク国論
止ムヲ得ズ回答スト雖モ東萊府使ニ於テモ此事
ニ苦慮スルコト不少而ノ其間病ニ依テ辞表ヲ上レ
リ故ニ来月中旬ニハ新府使モ到任シ朝廷ノ命意
モ從テ有ルヘシ別遣モ是ヲ依憑セリ然ルニ今忽
然歸装ヲ促サルハ遺憾ニ存スル所以ナリ曰ク今
日ニ至リテ安レリ如是議ヲ須ニ貴國ハ自ラ貴國
ノ處分アルヘシ正官公ハ只我朝命ニ從テ進退サ
ラルコトナリ云ク公ハ云ク西間ニ尽カセラレシコ
トナレハ今後トテモ宜シク周旋ヲ願フ所ナリ但シ

此回正官公上京アラハ我国情モ自ラ貴朝ニ徹底
シ旧例ニ因テ變通ノ路モアルヘシ偏ニ之ヲ祈ル
ノミ而ルニ後日ノ公幹ハ何人ニ照會ス可キヤ曰
ク僕等不肖ト雖モ暫時代理スルナレハ如日本館
ニ照會セラル可シ云ク諾一兩日前別差姓ハ李名
ハ濬秀字ハ伯深ト云フモノ到任セリ且シク知遇
セラレレト云フト語リテ退ク午後任所ヲ登シ
屏府スト云フ

理事官随行尾間書記生ヲ館ニ留メ今後ノ當務數
条ヲ書示シ石幡書記生金春磯吉ヲ随ヘ午後十二
時金華丸ニ乗組ミ草梁頂ヲ登ス本船甚ク小間十
五馬故ニ動搖モ亦殊ニ甚クシ

同二十二日晴 午後二時嚴原ニ入港用達古谷茂左

外務省

衛門ノ家ニ病シ長崎縣支廳ニ到着ノコトヲ告グ原
田長崎縣中屬来ル

同二十三日晴 曾テ嚴原支廳ニ預ケ置ク所ノ公館
經費殘金ヲ受取り其証書ヲ消却ス

昨廿二日午後四時本州竹敷村領字千島島へ英國
艦一隻繫泊乗組二百人内日本人三名外務省官負
モ乗組アル旨支廳ヨリ副戸長ノ届書ヲ副ヘテ照
會ニ及ヘリ依テ現状探聞ノ為メ午後六時急ニ金
春磯吉ヲ該地ニ派出ス

同二十四日晴 午前六時金春磯吉歸リ報ス外務官
負乗組云々ハ金ク訛傳ニシテ英國軍艦セルベヤ
号艦長名ハシンジヨント云フ朝鮮国海岸測量ノ
為メ昨二十三日平戸ヲ登シ公途該地ニ繫レリ今

日ハ必ラス韓地ニ向テ登スルナラン乗組人負ハ
百十人ナリト云フ

同二十五日陰 昨夜十二時公館ヨリ飛船来リ云彼
通事等ノ語ニ理事官ノ帰国ハ必ラス不首尾ノ故
ナラン蓋シ同官帰朝我事情ヲ上伸アラハ貴国自
ラ其情ヲ容レ我意ニ從カヒ旧例ニ依テ変通ノ道
アルヘシ訓導モ之ヲ希フト且本日英國軍艦突然
入港理事官ニ面晤センコトヲ乞フ依テ事實ヲ返答
ス本艦ハ此地測量ノ為暫ラク碇泊ス可シト云フ
同廿六日晴 午後一時對州ヲ登ス海波恬カナリ須
臾ニシテ雲東北ニ起リ七時壹州勝本港ニ入ル微
雨時ニ降り風勢益烈シ乃チ上陸シテ和泉屋ニ宿
ス

外務省

同廿七日晴 怒濤猶高キヲ以テ登セス
同廿八日晴 夜十二時勝本ヲ登シ長寄ニ向フ
同廿九日晴 午前八時平戸海峡ヲ経テ午後六時長
崎ニ入港上陸シテ石灰町本山某ノ家ニ宿シ直ニ
電線ヲ以テ着崎ノコトヲ本省ニ告ントス時ニ本縣
大属上村直則来リ昨日雲揚艦朝鮮ヨリ帰り来リ
其話ニ本月二十日本艦測量ノ為ノ京畿道江華島
ニ沿ヘ漢江ニ入り脚艇ヲ下シテ河流ヲ泝ルニ彼
レ妄舉我日旗ヲ砲射セリ故ニ即時艦中ニ令シテ
暫ラリ碇砦シテ本艦ニ帰ル翌廿一日本艦ノ三橋
ニ日章ヲ掲ケ我大日本船タルヲ表シ砲臺ノ下ニ
進ノ昨日妄舉ノ情ヲ問ハントス然ルニ彼レ又砲
撃スルコト初ノノ如シ故ニ我之レニ應スト雖モ河

流湍急ニシテ運轉自由ヲ得バ且ツ其距離遠クシ
テ砲丸達シ難キヲ以テ終ニ退テ莠ニノ砲台ニ迫
ルニ守兵既ニ遁逃故ニ之ヲ火シ過テ莠一砲台ノ
下ニ碇ヲ下ス時日己ニ暮ル翌廿三日昧爽艦ヲ進
ム彼レ遑遽烈シク砲射スト雖凡彈丸皆海ニ墜テ
達セス而ノ我大小砲虛奈ナシ乃チ脚艇ヲ下シ士
官六名水夫二十余名ヲ上陸撃破セシノ城ニ迫ル
此時我水夫二名創ヲ被ル一名ハ船ニ乗テ後死ス衆奮激固迫
ス其間數名墻ヲ踰エテ城ニ入り門ヲ開テ我兵ヲ
納レ放火突戦ス彼將士凡五百人狼狽逃竄スルヲ
羣羊ノ虎ニ遭フニ同シ斬殺二十余人海ヲ游テ逃
レシトスルモノヲ狙撃スルヲ數人俘獲亦十余人
皆戰慄シテ仰キ見ルモノナシ大砲三十六門弓銃

外務省

刀槍旗章圖書樂器等尽ク彼俘獲ヲシテ擔負以テ
我艦ニ運輸セシノ其他城謀ト共ニ皆灰燼トナル
時日既ニ暮ル其俘獲ニ飲食ヲ給シテ放還ス而ノ
我兵艦内ニ宴ヲ張リ鼓ヲ過テ驩呼醉舞興ヲ尽シ
廿四日曉錨ヲ拔テ還ルト云フ是ニ於テ海軍出張
所及本縣共ニ理事官ノ猶彼ノ地ニ在ルヲ以テ速
ニ此変ヲ報シ且公館人民保護ノ為特ニ汽船ヲ發
セリコノ朝廷ニ伺フ其指令未タ達セスト雖凡即
今公ノ帰着ヲ聞クヲ以テ即チ此事ヲ告ク縣令參
事モ繼テ来リ晤スナラント云フ依テ更ニ本省ニ
左ノ電信ヲ施ク

今日長崎へ着シ雲揚艦ノ事ヲ聞ケリ英吉利
艦モ此程金山へ往キ測量中ナリ公館ノ丁氣

遣ハシ僕是ヨリ引返シ公館人民ヲ維持スヘ
キヤ御指圖ニ依リ春日艦ニテ渡リタシ同艦
ニモ御指令可被下候

九月廿九日

長崎ニテ
森山少丞

東京
外務卿

須臾ニシテ宮川縣令渡迎參事河内權參事共ニ来
リ雲揚艦ノ戰事ヲ話ス且朝廷軍艦ヲ公館ニ派ス
ルノ議ニ決シ其指令已ニ達スト云フ談話時ヲ移
シテ歸ル雲揚艦長井上少佐来リ現地ノ実況ヲ譚
ス上村告ル所ニ同シ夜三時其寓ニ歸ル

同三十一日暗 理事官早起縣廳及ヒ井上少佐ノ寓
ヲ訪フ少佐已ニ上京ス可シトノ命ヲ受ケシト云
フ而ノ昨日同ノ所ノ指令未ク達セス依テ又電機

外務省

ヲ以テ伺フコト左ノ如シ

来ル二日便船アリ免モ角上京ス可キヤ御指
令アリタシ

九月三十一日

長崎ニテ
森山少丞

東京
外務卿

春日艦長磯辺海軍少佐来リ渡韓ノ命アリシ旨ヲ
告グ夜十二時外務卿ヨリ左ノ指令アリ

春日艦ニテ韓地へ渡リ人民保護ノ處分ヲ為
ス可シ雲揚艦ノ件ニ自朝鮮政府ヨリ東萊府
使ヲ以テ問ヘ来ルコトアラハ其儀ハ我委任中
ノコニアラス本国朝廷へ奏聞ノ上返辞アル
可シト答ヘ置キ委シク其旨ヲ申シ越ス可シ

九月三十日

寺島外務卿

森山少丞

右ノ命ヲ承ルヲ以テ春日艦長磯辺海軍少佐雲揚
艦長井上海軍少佐ト會シ明日發艦ノコヲ議ス
十月一日暗 昨夜達スル所ノ指令猶未タ其委情ヲ
了シ難キ所アルヲ以テ又左ノ電報ヲ發ス

命ニ依リ今日二時ニ發ス可シ僕己ニ歸リ又
往テバ内外疑ヒ彼ノ一件モ彼ガ承知ノ事ナ
レバ彼ヨリ問ヒ来ラバ知ラズトハ言ヒ難シ
難易事宜ニ随ヒ我モ大略ヲ述ベ何レ我政府
ヨリ御指令アル可シト答ヘ人民保護ヲ旨ト
ス可シ御承知下サル可シ

十月一日

森山少丞

寺嶋外務卿

外務省

此日二時接錨ノ期ナルヲ以テ猶將來ノ慶分ヲ仰
カン為ノ本省ヘノ公信ヲ裁シ之ヲ随從金春磯吉
ニ附ス明二日米國郵船ニ便シ進贈物品等ヲ領シ
テ上京セシム調度既ニ整ヘ理事官石幡書記生ヲ
随ヒ午後第二時春日艦ニ乗ル井上少佐艦ニ在リ
既ニシテ宮川縣令渡辺参事河内權参事モ亦来リ
テ一行ニ別ヲ告ク而シテ海軍省電報ノ意明ラナラ
サルヲ以テ終ニ錨ヲ拔ク能ハズ明曉ヲ待テ發セ
ントス乗組人負左ノ如シ

海軍少佐

磯邊 包義

日 中尉

高木 安行

日 日

加藤 直方

日 中機関士

芦田 常徳

日	少尉	野村 綱寛
日	日	木村 頼藏
日	日	高木英次郎
日	少機関士	松尾 凌多
日	少軍醫	丸山 正發
日	軍醫副	秩父 克然
日	少尉補	河野 通政
日	日	向井 義勝
日	十三等出仕	松永 敦化
日	御雇通舟官	佐々木 知治
外ニ下士以下水夫ニ至ルマテ九十二人		
海兵十七人雇鍛冶一人		
惣計百二十四人		
外務省		
同二日晴 午前六時長崎港ヲ發シ十二時平戸五島ノ海峡ヲ過對州阿蘇浦ヲ指シテ駛ル北風清ヲ捲テ澎湃天ヲ吞ム豆酸岬ヲ過ルニ及テ日正ニ暮ル故ニ阿蘇浦口ヲ認ル能ハス直ニ朝鮮ヲ指シテ走ル夜半車輪ヲ損ス艦ヲ駐メテ修補スルヲ數時間既ニシテ東方白シ 同三日晴 修補漸ク成リ針路ヲ定メテ走り將ニ金山浦口ニ臨ントス乃チ炮門ヲ開キ非常ヲ警ム予前十時錨ヲ公館前灣ニ投ス 理事官既ニ館ニ就キ在勤住永尾間兩書記生ニ近況ヲ問フニ別ニ異事ナシト雖モ向キニ英艦渡泊ノ際彼レ兵ヲ券リ威ヲ張り防禦ノ用ヲ為ス英艦既ニ歸ルニ及テ彼等誇言ノ云フ本日彼レ猶滯泊		

セハ断然追攘ス可キ議ニ決セリ若シ聞争ニ至ラ
ハ館人ノ目ヲ慰ムルニ足ランニ其事ナキハ遺憾
ト云フヘシト尔後數三日ハ釜山城辺兵ヲ練リ砲
ヲ發シ我ニ武威ヲ示スカ如シ其後彼等云フ我國
兵備大ニ調ヒ今ヤ何国人ノ来撃スルアルモ決シ
テ妨ケナシト其侵侮常ニ倍ス且一昨一日多太倉
使將卒二百人餘ヲ率ヒ絶影島ニ来リ捕馬ヲ名ト
シ發炮練兵終日ニ止ノタリト
雲揚艦ノ江華ニ事アリシヨリ既ニ十餘日ヲ經ル
モ彼レ毫モ辞色ニ顯ハサバルモノハ其嚴密ニ人
言ヲ防クヲ見ル可シ故ニ我モ亦他ニ洩シテ戒
ノ春日艦長ト協議シ夜直巡警等潛カニ人民保護
ノ備ヲ為ス

外務省

春日艦着館後韓人凡ソ百名許遽カニ絶影島ニ聚
リ樹ヲ伐リ茅ヲ剪リ館ニ向テ陣小屋ノ如キモノ
ヲ作ル夜ニ至テ漸ク成リ其人皆南迎ニ去ル
理事官再渡ノヲ住永書記生ヲシテ訓導ニ告ケシ
ム其書畧左ノ如シ

理事官公本日着館セラレタリ依テ是ヲ公ニ告ク不宣
陪通事来テ訓導ハ一兩日来釜山水營ニ奔走シ昨
夕遽カニ大丘監司ノ召ニ依テ該地ニ赴ケリト云
別差ハ本日適任所ニ在ルヲ以テ入館洵ニトシテ
理事官ノ再渡ヲ賀シ軍艦一覽ヲ乞フ乃チ之ヲ允
ス彼レ本艦ノ機関兵械ノ壯嚴ナルヲ見テ驚歎シ
テ去レリ本日昧爽釜山倉使ハ遽カニ公事アリテ
多太倉使ノ許ニ至レリト云フ

理事官既ニ滞リ十日ヲ出ズ軍艦ヲ率キテ再渡セ
ルヲ以テ彼レノ恐懼最モ甚シ我館人ト雖モ常カ
ニ疑懼セサルモノナシ釜山ニハ惶遽土兵ヲ聚メ
間諜ヲ放テ我動靜ヲ偵メ此夕第七時長崎縣嚴原
支廳在勤中屬原田謙吾漁舸ヲ駛セテ雲揚一件ヲ
公館ヘ報知ノ為宮川縣令ノ書ヲ携ヘ来ル蓋シ理
事官己ニ歸リ公館在勤ノ負少キヲ慮リ以テカタ
添ヘントノ意ナリ而ノ雲揚ノ一舉ハ既ニ對州ニ
傳播シ且館民等モ亦耳語懸念スル聞ヘアリ依テ
屬官及ヒ館商重立ナタルモノ數名ヲ集メ該件傳
播ニヨリ叨リニ驚擾ス可ラス且韓人ヘ傳播セサ
ルヤウ注意シ朝廷人民保護ノ意ヲ體認スヘシト
内達セリ此夜釜山近傍諸所ニ篝火ヲ點シ松明ノ

外務省

往來絶ヘス彼モ亦戒嚴スルヲ知ルヘシ

同四日 彼官吏等例日入館ノ韓人ヲ任所ニ集メ内
情ヲ洩ラサス外情ヲ探聞シ一々申出ワヘキ旨嚴
達セシ由而ノ韓人ノ入館常ノ如シ彼カ情ヲ探偵
スルニ過日來兵備整頓ノ謗言多太金使牧ノ島調
練釜山金使多太浦行キ訓導營所ノ奔走大丘ノ出
張牧ノ島陣小屋等總テ雲揚一件ニ因セシ者ナル
ヘシ乃チ現場及ヒ後來ノ方案ヲ裁シテ第六十五号
公信ヲ發ス且ツ宮川縣令ニ畧狀ヲ告ゲ在對州浦
瀨書記生ニ渡轉ノ事ヲ達ス
牧島即チ絶影島ナリ陣小屋ニ屯集セル人負昨ノ如シ而ソ
釜山東萊水營多太浦等ノ近傍新夕ニ兵ヲ徵スル
ノ説アリ

同五日 本日陪通事等ノ語ニ東萊府使ハ昨日上京
セシト云フ而ノ韓人一般ノ説ニ潛カニ大丘ニ至
レリト且ツ東萊城ハ釜山水營ノ軍官ヲ派シテ之
ヲ守リ兵負五百ヲ加フ釜山水營ハ三百多太浦百
名其他古館等ノ要衝ニハ數十人ヲ、兵ヲ屯シ非
常ヲ警ムト而ノ本日初ノテ彼ヨリ江華島ニ於テ
日本軍艦ヲ砲撃シ我國却テ大敗ヲ取レリトノ傳
説アリ且通事等書記生ノ寓ニ來リ未タ公然官報
アルニ非レトモ此事己ニ傳播掩フ可ラス此役ヤ
我ヨリ事端ヲ開キ自カラ禍ヲ招クナリト歎息シ
テ歸ル其他韓人等皆寒慄古ヲ捲テ茫然タリ

同六日 理事官春日艦ニ至ル 此日彼ノ軍官等商人
ニ擬シ觀館ヲ名トシ入館スルモノアリ且從前瀛

外務省

船ノ來ルヤ夜市ヲ嚴束シ出入ヲ規制スルハ彼レ
ノ常ナルニ此回ハ然ラス却テ之ヲ寬ニスルノ狀
アリ是レ我カ氣鋒ヲ緩フシ我声息ヲ窺ハントス
ルノ畧ナリ蓋シ稍交際ノ術ヲ得タルモノト謂ニ
乎

同七日 雲揚一件該國傳播上下紛憂ノ情ヲ裁シ十
六号公信ヲ發ス昨日来巨濟島嘉德館七里浦ニ流
船ニ隻繫泊シ彼地土人稍驚擾セルノ説アリ依テ
夜十一時輕艇ヲ出シテ之ヲ偵ハシム

同八日 嘉德浦探訪ノ者歸リ報シテ云現今其船隻
ヲ見バト岳モ海辺數所ニ篝火ヲ點シ猶警戒アル
モノ、如シ浦口漁舟ニ遭フテ其事ヲ質スニ彼輩
涕然知ラスト答フ其狀ヲ察スルニ一旦繫泊シテ

退歸セシナラン

同九日 韓人等ノ話ニ坂ノ下ヘ多太釜山ノ軍官等
十數名出張土人ヲ任役スルヲ甚ク唐古館釜山等
ニ於テハ戸毎ニ賦錢ヲ課シ怨讎ノ声路ニ盈ツ僕
等事アルニ至ラハ寧口館ニ來テ保護ヲ乞フ近隣
ノ民情等節ヲ合スカ如シ

同十日 頃日韓人等專ラ話スヲアリ龍塘ニ砲台ヲ
築キ海底ニ水雷ヲ構ルノ舉アリト因テ之ヲ他ニ
質スニ低声皆然リト云フ龍塘ハ俗ニ赤崎ト称シ
釜浦進ロ一大要屹ナリ而テ其砲台建築ノ如キ彼
レノ随意タリト雖モ水雷ノ舉ニ於テハ我船隻出
入ノ際必ス其危害免ル可ラス若シ此事真ナラハ
断然撤却ノ議照會セサル可ラス故ニ先ツ探偵者

外務省

ヲ派シテ之ヲ窺ハシムルニ未タ其實ヲ得ス

同十一日 浦瀨書記生着館曾ラ令スル所ヲ以テノ
故ナリ韓人ノ話ニ訓導ハ昨夕東萊ニ歸リ來レリ
府使ハ猶大立ニアリト

同十二日 午前十一時滿珠艦着館更ニ外務卿ノ指令
ヲ達セリ

理事官外務少丞森山茂

一 今般朝鮮國ト我測量船ト相砲撃シタル趣ニ
付我在韓ノ人民鎮靜保護ノ為長崎表ヨリ再
渡可致旨電信ヲ以テ指令ニ及ヒ更ニ心得方
申達シ候事

一 若シ彼レ我官民ヲ追去セシムヘシト言ハ、
其旨意彼政府ヨリ發シタル旨ヲ記載シタル

書面ヲ取り之ヲ上申シテ可待指令安リニ退
去セシム可ラサル事

一若シ彼レ我官民ニ迫リテ疎暴ノ舉動アラン
トスル勢状ヲ見ハ速ニ春日鑑ト協議シ人民
損害ナキ様可取計事

一何レノ模様ニ出ルトモ(現場ノ巨細ヲ遣サス
詳ニ上申可致事

右指令候事

明治八年十月一日 外務卿寺島宗則印

訓導ヨリ左ノ書ヲ致セリ

書記生公前上

間作營行今纔還來

端此已為留案末即謝甚悵々秋氣日佳 履居

外務省

清迪 理事官公遠涉海濤無瑕安裕潮々祝々

僕多日驅頓之餘懣苦難振未能赴攄以悵以歎

留不宜暫上

乙亥九月十三日

訓導 印

同十三日 別差就館滿珠艦拜見ノヲヲ乞フ乃々之

ヲ許ス浦瀨書記生ニ告ケテ言フ公ノ渡來ヲ聞ク

ヤ別遣金知事訓導モ共ニ歡悅シ必ラス近日來リ

就テ對話セント語畢テ歸ル

春日艦ニテ火入調練アリ大小砲連發硝烟海ヲ蔽

ヒ聲四山ヲ震動ス

午後陪通事等浦瀨ノ寓ニ來リ本日訓導釜山ニ來リ公ノ渡來平安ヲ

賀ス可キナレハ公事劇甚ニシテ慶スル能ハス十七日ニ東萊府使新旧

交代ノヲアリ事ヲバ必ス入館シテ情誼ヲ述フ可シ依

テ先ツ僕等ナシテ此意ヲ通セシムト浦瀬日昨日
接收スル訓導ノ書ヲ見ルニ此間營行駐頓ノ餘儀
苦難振トアリシニ本日己ニ快愈ヲ得ラレシカ珍
重ニミト彼レ顔黙シテ去ル

指令拝接并ニ訓導府龍塘砲台等ノ丁ヲ併セテ
十六号公信ヲ發ス

同十四日 東萊ノ内稗將入館ニ館内ノ形況ヲ巡偵
シ商舎ニ憩息シテ近狀ヲ探聞シ廳前ノ野戰砲ヲ
觀テ還ル

同十五日 新府使今日東萊ニ着セリト未タ其姓名
ヲ詳カニセス而ノ赤崎ノ水雷龍塘砲台ノ説區々
タリ因テ探偵ノモノヲ以テ牛宮ニ上陸シ村落ニ
入ル村人敢テ障ヘズ巔ヲ踰ル丁九ノ三ツ許ニシ

外務省

テ水營ヲ見ル更ニ異事アル丁ナシ終ニ黒崎ヲ指
シテ途ヲ取ル亦常ニ異ナルモノヲ見バト云フ近
日韓人ノ語ニ我人民日本人ノ為ニ被害セラルハ
丁十中ノ九人ニ至ルトモ我ヨリ決シテ抗抵スヘ
カラズ且理事官東萊前注ノ舉アルモ従前ノ如ク
之ヲ途ニ阻ム等ノ無礼アル可ラスト東萊釜山ヨ
リノ嚴令アリト云フ

陪通事金福珠ノ話ニ訓導大丘在營中ニ理事官公
再渡ノ丁ヲ報セシニ其返書ニ公今再渡ニ付テハ
大丘ニ申シ且ツ速ニ朝廷ニ伺ハサルヲ得サルノ
件アリ故ニ既ニ九月六日（我本月）其書ヲ上レリ新
府使ノ未タ京地ヲ發セサル以前此申報達セシマ
否若シ己ニ達セシニ於テハ府使此面ノ到任必ラ

不廟議ノ如何ヲ奉シ来リシトモアラシカ若シ夫
レ斯ノ面敵無キウチハ縱令館中ヨリ頻リニ就館
ヲ促ストモ汝等宜シク其間ヲ弥縫シ置クヘシト
同十六日 磯邊海軍少佐尾間書記生等ト共ニ遊歩
シテ太待ニ赴ク山腹ヲ過ルニ當テ土人アリ誤テ
石ヲ轉ス即チ之ヲ譴ムレハ彼等懼伏シテ罪ヲ乞
フ

釜山軍官ノ説ニ理事官再ヒ渡ルヤ必ラス問フ所
アルナラニ春未文詛不整ハ固是我背約反信ニ因
ル而ノ理事官内其朝廷ニ向テ不成ノ責免ル可ラ
ス之レニ依テ觀レハ同官必ラス死ヲ決シテ入府
シ以テ接不接ノ詰論アルヘシト東萊釜山兩使共
ニ甚タ之ヲ懼ル、ト云フ

外務省

同十七日 佐永友輔草淵原ニ於テ土人ノ妄動ニ遭
ヒ後中和シテ還ルト

同十八日 通事等ノ詰ニ朝市ノ魚菜僅少ニテハ館
人困乏スヘシ且シ潤澤ニ鬻賣スヘシトノ布令
アリト

同十九日 通事等館人ニ告ケテ曰我邦日本艦ヲ砲
撃セシハ未タ貴国ニ是ノ如キ船隻アルヲ知ラサ
ルヲ以テナリ實ニ双方ノ措誤ナリトノ説アリト
云フ

同二十日 金福珠来リ我邦日本艦ヲ砲撃セシハ実
ニ妄動ト云フヘシ必ラス日本人ノ激怒ヲ致シ他
日間ハル、所アルヘシ而シテ此事ヤ日本ニ理ア
リテ我ニ理ナシ其推問ノ意モ曲テ從ハサルヲ得

サルニ至ランカ雖然我談判ノ都合ニヨラハ決テ
兵革ヲ動カス等ノコニ至ラス必ス和好ノ時アル
可シ我邦素ヨリ日本ニ敵對スルノ勢意ナシト云
近日常内兵備ノ訖盛ナリト雖其其實甚タ衰弛セ
シカ如シ土人ノ駆役ニ困シ官吏ヲ見ルコ赤鬼
ノ如シ

同二十一日 庚十七号公信ヲ發ス

同二十二日 訓導就館住永尾間兩書記生ヲシテ應
接セシム彼レ理事官再渡ノ勞ヲ慰シ且旧府使一
昨二十日病故セリト云フノミ而ノ雲揚一件ハ漠
然不知モノ、如シ果ノ彼カ曖昧ノ情ヲ見ルニ足
ル

同二十三日 無事漠然ノ狀ヲ裁シ庚十八号公信ヲ

外務省

發ス

同二十四日 頃日朝市韓人ノ入館遅刻シ館人朝發
ノ用ニ欠ルヲ以テ早起開市ス可シ若シ遅刻スル
者ハ入館ヲ許サスト彼官吏ヨリ嚴令セリト云フ
同二十五日 釜山僉使ノ令ナリトテ軍官兩名理事
官ノ寓ニ来リ云ク理事官再渡ナリシニ時寒冷ニ
際セリ故ニ従前薪炭定額ノ數ヲ増シテ送進スヘ
シ且ツ以後ハ其屬官ヘモ數ヲ定メテ供送スヘシ
ト諛言ヲ逞シテ去ル

同二十六日 午前五時突然春日艦拔錨多太浦近傍
ニ赴ク彼通事等驚喜奔走シテ已ニ軍艦ノ帰リシ
ヲ賀ス而ノ午後六時又帰港スルヲ以テ愕然タリ
釜山浦迎篝火ヲ増シ夜警ヲ為ス

同二十七日 午前九時瀛舩ノ釜浦ニ駛入スルアリ
即我軍艦孟春號ナリ橋頭將旗ヲ掲ク因テ春日號
ヨリ祝砲ヲ發ス孟春モ亦之ニ應シ聲勢凜然タリ
韓人驚駭皆顔色ナシ釜山城邊人ノ相往來スルヲ織
ガ如ク老幼婦女ハ他ニ遁避セリト旣ニシテ中年
田海軍少將海兵ヲ率ヒ又祝砲ヲ發セシノテ上陸
ス彼通事輩其行装ノ嚴肅ナルヲ見今ヤ大事ノ將
ニ起ラントスルヲ恐怖シ奔走狼狽見ルニ堪ハス
而ノ我館人モ其何タルヲ知ラザレバ彼ヲ探索ノ
術モ亦盡タリ韓人ノ寒膽驚動未タ曾テ今日ヨリ
甚シキハナシ

中牟田海軍少將屬官ヲ從ヒ就館其來意ヲ告ク本
省四等書記生山之城祐長モ亦本館在勤ノ命ヲ承

外務省

ケテ同ク來レリ而シテ理事官森山茂再渡以來該
地ノ景況ヲ上申ノ為ノ歸京スヘキ旨外務卿ノ指
令ヲ拜接セリ春日艦モ亦歸京ノ命アリ

同二十八日 中牟田海軍少將春日艦ノ海兵十數名
ヲ留メシメテ本館巡警ノ用ニ備フ
理事官歸京ノ旨書記生ヲシテ訓導ヲ告ケシム彼
レ我聲價ノ計リ得カタクキヲ以テ益恐怖セリ其書
左ニ

訓導玄公前

理事官公將ニ歸京セントス仍テ之ヲ 公ニ執
ス暫上

明治八年十月廿八日

住永書記生

同二十九日 理事官石幡書記生ヲ隨ヒ春日艦ニ乘

組直ニ對州ニ向テ發入滿珠丸モ共ニ拔錨セリ午
後三時嚴原ニ達ス

同三十日 昧爽嚴原ヲ發シ玄海ヲ過キ午後三時馬

關ノ海峡ニ入ル

同三十一日 午後七時兵庫港ニ達ス

十一月一日 午後四時兵庫港ヲ發ス

同二日 遠州洋ヲ過ク風濤甚シ

同三日 午前七時品川海ニ投錨午時歸京

同四日 午前十時理事官副官ト共ニ參院ニ適

天皇陛下臨御アリ大臣參議班列理事官本任ノ顛
末及ヒ近時ノ實況ヲ直奏シ復命書並ニ再渡以來
ノ日表ヲ録上シ正午退朝ス

外務省

復命書

臣茂 等最ニ理事官ノ重命ヲ奉シ二月二十四日朝
鮮國草梁公館ニ安抵シ該國官辦訓導ト議ヲ始メ則
チ昨約ヲ追フテ東萊ニ抵リ府使ニ親接面議セン
ヲ求ム然ルニ彼レ事例未タ達ハス稟啓ヲ經ルノ間
其期ヲ延ンテ請フ乃チ之ヲ諾シ以テ其回教ヲ待
ツ三月ニ至リ訓導躬親ヲ上京スヘキ命アル由ヲ以
テ更ニ延期ヲ請フ臣等誠ニ以為ラク茲再曠滯此ニ
至ル須ラク東萊ニ前往シ以テ其成局ヲ期センニハ
ト乃チ訓導ヲシテ先導セシメシニ彼レ遑遽言ヲ轉
シテ府使親カラ宴廳ニ來リ相接スヘキノ命意ヲ承
ケタリト陳ス因テ其日字ヲ約シ以テ違フナキヲ誓
ハシム雖然服制誹斥ノ因終ニ此ニ胚胎シ訓導遽然

上京スルニ及テ書ヲ遣シテ更ニ來往間ノ延期ヲ請
フ五月訓導京ヨリ帰ルヤ論難疊次遂ニ我服制ニ干
預シ頗ル誹議ニ涉ル我レ之ヲ弁駁シ彼レ理屈シ勢
迫ルニ及テ又啓報載ヲ待ツノ間更ニ延期ヲ請フト
言フ而テ六月ニ至リ終ニ服制ノミナラス凡例旧ニ
違フトキハ許施ス可ラスト明答セリ背約ノ實於是
乎確然故ニ副官廣津弘信ヲシテ先發事由ヲ伸シ以
テ動止ノ指教ヲ仰カシム蓋シ二月ヨリ六月ニ至リ
延期數回文書數通而彼レ一言前約ノ履背ニ及ハス
彼レ固ヨリ自ラ約シ又自ラ背キ既ニ説明ヲ經ルノ
服制ヲ謗黷シ表裏反覆其底意ヲ見ス之ヲ謹レハ則
チ僕ノ無信ニ非ス朝意ノ所在如何トモス可ラスト
ノ一語ニ過ス臣等泰ナク重任ヲ負ヒ誠ヲ致シカチ

外務省

竭シ其衷詐ヲ恕シ善言以テ誘致スレハ却テ之ヲ慢
リ切言以テ開導スレハ則チ之ヲ疑ヒ誘致道ナク開
導術尽キ終ニ圓鑿方枘相容レス臣等借ラ彼カ狀情
ノ何ニ縁テ此ニ至ルヤノ因ヲ求ムルニ實ニ其國大
臣黜陟延議一變セシニ在リ則チ是臣等口舌ノ能ク
ヲスル所ニ非ルヲ知レリ故ニ含忍以テ動止ノ節度
ヲ仰ケリ以上ノ要領ハ弘信既ニ上伸ス而ノ弘信彼
地ヲ發スルノ後彼レ猶背約ノ名ヲ避ンカ為ノ特ニ
別遣堂上ヲ派シ斷ニ非ス不斷ニ非ルノ機智ヲ用井
以テ其非ヲ飾ラントス我レ其侮弄ヲ責ノ之ニ接セ
ス尔後彼レ漫然措テ問ハス而ルニ九月二十日彼地
退去ノ旨ヲ奉ス即チ翌二十一日草梁館ヲ發シ世九
日長崎ニ至リ始メテ雲揚艦ノ事ヲ聞キ電機ヲ以テ

伺フ所アリ而ノ春日艦ニ乗シ再渡以テ人民保護ノ
處分ヲ為スヘシトノ故ヲ承ク十月三日彼地ニ航シ
以テ其情勢ヲ偵スルニ彼レ頗ル警備ノ状アリ乃チ
春日艦ト協議シ以テ保護ノ備ヘヲ為ス十三日ニ至
リ訓導大丘ヨリ帰府スルノ旨ヲ以テ入館シ茂カ再
渡安裕ノ賀辞ヲ致スノミニシテ雲揚ノ件ニ於テハ
漠然知ラサルモノ、如シ二十七日中牟田海軍少將
着館外務卿ノ指令ヲ接到シ則チ二十九日公館ヲ發
シ十一月三日帰京ス茲ニ再渡以來ノ日表ヲ録上シ
謹テ復命ス

明治八年十一月四日

外務少丞森山茂

ト
事
第